2025 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	**フランス革命におけるフィジオクラット受容と展開** **－共同体の基礎としての自然と人為の探求－**
キーワード	①フランス革命、②啓蒙思想、③社会思想

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏　名	ハセガワ　タクヤ 長谷川　拓彌
配付時の所属先・職位等 （令和７年４月１日現在）	金沢学院大学　経済学部　経済学科　講師
現在の所属先・職位等	金沢学院大学　経済学部　経済学科　講師
プロフィール	現代の諸問題や社会科学の前提となる「社会」がいかに認識されてきたか、またそれを取り巻く「市民」や「自由」といった近代的価値を構成する諸理念がどのように形成されてきたかについて、思想の歴史を通して考えています。特に近代の画期としてのフランス革命に興味を持っています。

1. 研究の概要

本研究はフランス革命の思想を、旧体制末期の政治・社会思想をリードしたフィジオクラット思想との関係を検討した。そのために、これまでフィジオクラットとは対極の立場にあると考えられてきたサン＝ジュストをとりあげた。そして彼らが共通関心とした共同体と「自然」を巡る問題の構造的類似性を解明しようと試みた。サン＝ジュストと、ロシアで活動した周縁的なフィジオクラットであるルクレール『禹大王と孔子』の問題関心の間には共通性が見られる。サン＝ジュストは人間間の親密な関係を起点にして共同体を構想したが、そうした構想は、愛情にもとづく家族的関係として君主制国家を語ったルクレールと同様に、人間の愛情関係としての「自然」により政治社会・経済社会を基礎づけようとする試みであった。

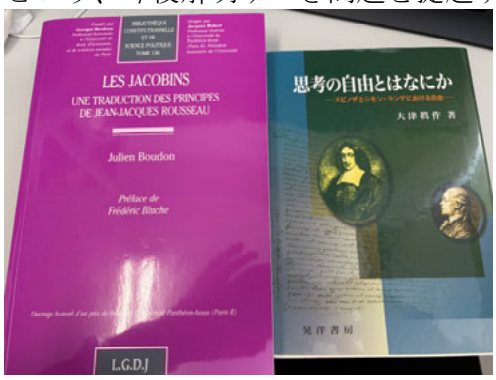
2. 研究の動機、目的

本研究は 18 世紀の経済的自由主義を説く官僚集団であるフィジオクラットと革命期の活動家サン＝ジュストに注目して、彼らの社会構想における「自然」概念の役割の解明を試みた。フランス革命において複数の近代社会構想が競合しつつ存在したことを明らかにする計画の一部である。恐怖政治の中心となるジャコバン派主導者の一人であったサン＝ジュストは自由主義的な政治経済学に影響を受けた政治家たちに対して批判的な立場にあった。しかしサン＝ジュストは、他の論者と比較して「自然」の道徳的な側面に注目したルクレール『禹大王と孔子』を所有しており、そこで共同体の基礎として示される道徳的人間関係に影響を受けていた可能性がある。本研究では、両者の検討を通して、サン＝ジュストがルクレールを通して迂回的な形でフィジオクラットの影響を受け、自身の思想を形成していったことを検討した。

3. 研究の結果

1）ルクレール『禹大王と孔子』における自然概念の解明：『禹大王と孔子』はいわゆる「王の鑑」のジャンルにつらなる作品であり、ケネー『中国の専制』に追随し、理想的国家として古代中国を語る著作である。ただし中国の優れた官僚組織に注目したケネーに対して、本書は民衆への教育に重点を置く。またそこでの教育は、フィジオクラットの中心概念である経済運

動としての自然秩序よりもむしろ、「あるべき人間関係」として道徳や習俗のレベルで「自然」に沿った関係を示すものであった。ルクレールは自然と親子関係に基づく愛情を結びつけることによって、君主と臣民の家父長主義的関係を説き、君主を頂点として各家にまで下降するような、愛情による統治を語った。しかしそれは同時に、君主制の枠内において民衆を自ら君主に従うと共に、その逸脱に抵抗する存在として主体化させる必要も示唆するものであった。
2)「自然について」における理想的共同体：サン＝ジュストの『フランス革命と憲法の精神』と「自然について」の分析により、彼が人間の社交的本性を基盤とする自然社会を理想的共同体として示したことを解明した。彼の社会構想は、当時の政治社会に関する言説へのラディカルな批判であった。それは「契約」による抑圧を生む政治社会や、経済的関係の全面化がもたらすエゴイズムによる社会として彼が批判した当時の社会像を相対化するものであった。
3) サン＝ジュストによるルクレール継承：サン＝ジュストの古代への注目と、彼の蔵書目録におけるルクレール『禹大王と孔子』の存在から、両者の継承関係を検討した。ただしサン＝ジュスト分析を活動前期のテクストに限定したこともあり、今回までの研究では、両者の直接的なつながりを明確に論証することはできなかった。しかし両者の類似性を分析することで以下のような重要な知見が得られた。①フィジオクラットは古代中国に普遍的な模範を見出していた。サン＝ジュストの蔵書目録の検討からも、彼が中国やインドなど非西洋圏の古代文明に関心を持ち、それらの内に純粋な形での「自然」な人間関係のあり方を模索しており、古代文明における自然の探求という関心においてフィジオクラットと関心を共有していたこと。②革命期の諸演説などにおいてサン＝ジュストはいわゆる経済的自由主義と対立する立場として示されることが多い。しかし例えば 1792 年 9 月 29 日演説で、彼は経済的自由を原理的には認めており、議論の焦点はむしろ共和国における経済的自由の条件としての相互信頼の回復であった。経済的関係を本質的基盤として構想される人間関係に対して、彼は自然概念の道徳的読み替えによって政治経済学批判を行っていたこと。これらは本研究の提起した問題が、さらなるテクストの読解によって解明される可能性を示唆する。さらに両思想家の継承関係を越えて、18 世紀における社会と自然の関係という共通の問題系に含まれた、政治的共同体の基盤とされる経済社会の検討と、ヨーロッパ的商業社会の前提を持たない非西洋圏古代への関心の結びつきという、今後解明すべき問題を提起するものである。



（写真：本助成で購入した図書の一部）

4. 研究者としてのこれからの展望

今回の研究を踏まえて、今後はさらに研究・教育活動に励みます。今回の研究を通して博士論文では十分に扱うことのできなかった、サン＝ジュストについて検討することができました。今後は今回の研究で発表した論文の成果を含めた書籍の出版を目指し、フランス自由主義の先駆けでもあるコンスタンら後年の思想家まで対象を拡大し近代社会形成に至る思想の歴史を研究します。またその成果を教育や社会活動にまで還元できるようにと考えています。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

今回はご支援いただきありがとうございました。人文学、特に思想史などでは現地調査や外国語文献を使用することが不可欠です。昨今の情勢もあり、そうした研究が徐々に難しくなっている中で、このような支援制度があることは大きな励みとなりました。また支援がなければできなかったような国外図書館での資料調査や貴重な経験を通して、新たな研究を行うことができました。今回の研究と経験をさらに深め、ご支援いただいた皆様や社会一般にまで還元できるように、自らの責任を自覚して活動していこうと思います。